——散切り頭を叩いてみれば、文明開化の音がする。

ぼくが、港というと思い出すのは、この言葉である。

散切りとは、「髪を剃りもせず結びもせず切り下げたままにしておくこと」、と広辞苑にあり、「明治初年に流行し、半髪・総髪に対して、文明開化の象徴とされた」、とある。

では、文明開化、である。「人知が開け、世の中が進歩すること。特に明治初年の近代化や欧化主義の風潮を言った……」。

若い読者のために簡単に御浚いしてみたが、日本は海から開けたのである。それも明治が始まる頃、そんなに古い話じゃあない。それまでのこの国は海を鎖し、「外国との通商や交易を禁止あるいは極端に制限して」昔ながらの因習の中で暮らしていた。

それが開国し、青い海が大きく開け、その向うに見知らぬ世界が遠くだが、それ故により希望に充ちて臨め、散切り頭の人たちが飛び跳ねる。自由である。未来がある。沸き立つような発展が期待できる。港とは、そういう文明開化の夢に溢れた、賑わいの場であった。こんな歴史を、改めて今、繰り返し考えてみたくなる。

——港とは、元もと文化の無い場所なんだ……。

そういう思いが、二十一世紀を迎えた現在、ぼくの心を大きく襲ってくる。そうなんだ。港とはそもそもが、文明開化に華やぐ“晴れ”の場であったのだ。

PORT ESSAY

ポート＊エッセイ

港町よ、文明の尻尾たるより、文化の頭たれ

●映画作家 **大林宣彦**

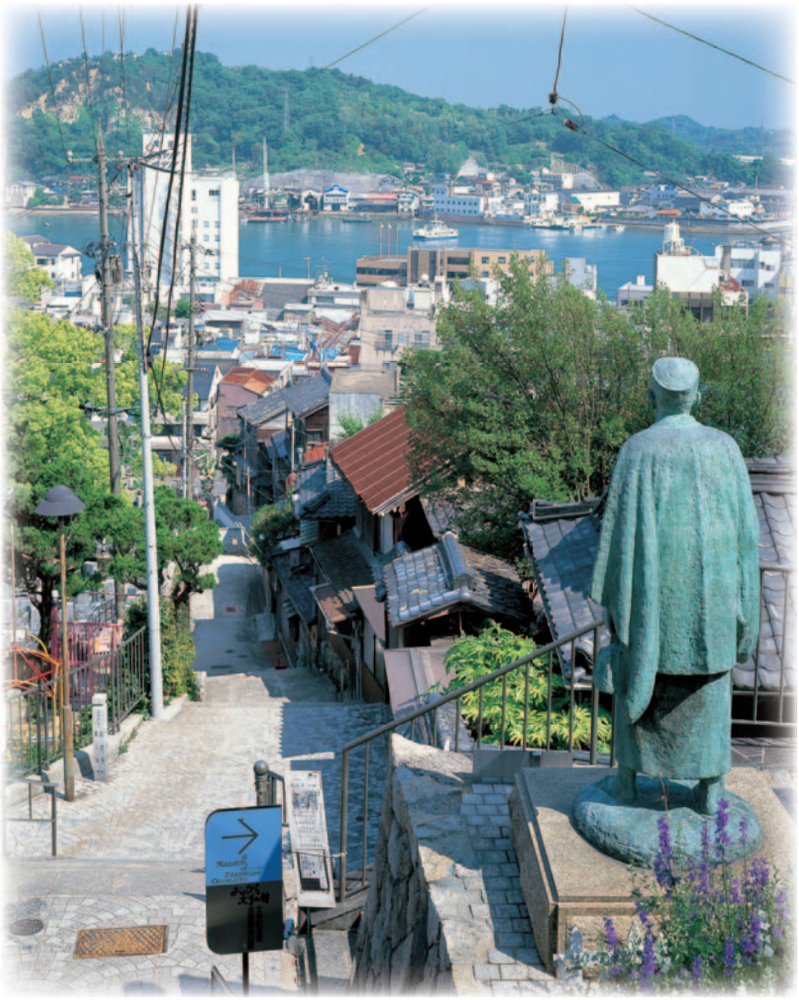
PROFILE
おおばやし・のぶひこ

1938年、広島県尾道市生まれ。幼少の頃より自宅にあった活動写真機に親しみ、個人で映画製作を始める。
1956年上京、成城大学在学中から自主製作映画の先駆者としてその名を知られる。
1977年公開の「HOUSE／ハウス」で劇場映画の監督・製作に進出。以後、故郷で撮影された尾道三部作の「転校生」、「時をかける少女」、「さびしんぼう」をはじめ、「異人たちとの夏」、「青春デンデケデケデケ」、「SADA」、「理由」、「転校生ーさよならあなた」など数々の名作を世に送り出し、芸術選奨文部大臣賞、ベルリン国際映画祭国際批評家連盟賞など受賞歴多数。2004年春には紫綬褒章受章。
第21回日本文芸大賞・特別賞を受賞した「日日世は好日」や、「ぼくの瀬戸内海案内」、「なぜ若者は老人に席を譲らなくなったのか」など著書も多い。

その“晴れ”を、ぼくも知っている。ぼくが生まれた町、尾道も古くからの港町である。賑わいの町だった。細い海を年中、群がるように船が往き交い、良く日の当る眩暈がする程明るい町に溢れる人は、歩くというよりもう駆け廻っていた。寺は身を寄せ合うように立ち並び、海から立ち登るような無数の石段道を、老人から子供たちまでが元気な蟻のように攀じ上る。

寺が多いのは、信仰よりも分限者*が多いからだ。信仰心が無いのではない。あの時分は太陽も夜の闇も海に吹く風も、総てが祈りの対象であった。人びとは信心深かった。信仰心は暮しの中に篤くあった。神社も寺もその

桜の頃の天寧寺三重ノ塔。



尾道港と坂の町並み。写真提供／JTBフォト（左ページも）

一部であり、“晴れ”の場所である。ぼくら子供にとっては、何よりも楽しい遊び場であった。

山から海に向う傾斜地に、町は滑り落ちそうに乗っかっていて、その中腹の瓦屋根の隙間を、うねるように汽車が走る。

今の人には想像がつかないだろうが、この汽車が当時は邪魔だったのである。なにしろ港は海の道を結ぶ重要な拠点だ。船の往き来だけで充分であり、あんな巨大な音を出し煤煙を吐き散らす汽車などは迷惑だ。で、尾道は町外れの西側に駅を作った。町の東に駅が在るのが発展の証であるというのに。お隣の三原も駅は要らんと、呉線という重要な支線の拠点たる駅は三原と尾道の間に造設された。現在はやはり反対側の隣町の一部に吸収された日本の最古の港の形を残す鞆ノ浦は、そこが半島であったために汽車を避けることが出来、御蔭で古い港は百年前の姿を今に止(とど)め得たが、現在の列車や車社会からは取り残されていった。

車社会が生んだ高度経済成長期やバブルの時代、瀬戸内の海の里は実はその全国的な賑わいからは落ち零れていた。車やバスを連ねてという現代風観光行政には適さず、慌て新幹線を停めようと駅を据えてはみたが、今や主要な列車は素通りだ。大騒ぎした海を渡る橋も疑問視されている。旅人は在来線を好み、船の旅に憧れる。船が無くては島の暮しも閉されていく。文明開化の夢が遠い昔噺となった今、では港はどういう生き方をすべきであるのか？

――今こそ、文化の町となるべきでは？

そういう思いの中から、ぼくは古里・尾道で、あの高度経済成長期の最中、町興しではなく町守りの映画作りを始めた。古い港町の暮しの姿を、今は文化の指針として示してみようと試みたのである。しかし港町の暮しのＤＮＡは昔ながらの文明開化であり、ぼくが愛する古い町の姿は恥部とされて壊され続けた。スクラップ・アンド・ビルド（壊して作れ）の考えは文明開化には寄りそい易く、日本古来の文化たるメンテナンス（維持・修復）の思想は港町には根付き難い。これが現代日本の悲劇の象徴でもあっただろう、と港町のあの沸き立つような賑いの中で育って来た、日本の一人の子供であったぼくは思う。

文明とは此処に無いものに憧れる力。文化とは元もと此処に在るものを尊む力。二十一世紀の日本がその文化の力をこそ明日に活かそうとする時、港のあり方はとても重要だ。

尾道を小京都と呼んだのは観光行政の失策である。それを言うなら小長崎であろう。港町は海を見詰める所から、そして百年前から学ぶことから明日が始まるのだ。温故知新、也ですね。

＊分限者＝資産家のこと。